

EurekaXIII

六年制通信 No.24 令和7年10月31日(金)号

やはり行動が先か

19日の日曜日に、およそ300名の来場者を迎えて入試説明会を実施しました。皆さん非常に熱心に耳を傾けていただけて、嬉しく思いました。ダンス部の諸君、探究の発表をしてくれた坂部、石川の両君ありがとう。また、ガイドウォークをはじめ当日の手伝いをしてくれた生徒諸君本当にありがとう。来校してくれた保護者も児童も君たちの姿を見て三重中を好ましい学校と捉えてくれるのですからね。

毎年説明会が終わると何人か質問に来られるのですが、ほとんどは入試当日の注意事項とか入学してから授業のスピードについていけるかとか、そういった質問が多い中で、今回「どうすれば集中力がつくでしょうか」と、なかなか即答できない質問を受けました。なるほど、昔に比べると確かに今の子どもの方が「気が散る」材料に事欠かないでしょうから、集中力を養うのにも今の方が苦勞するのかもしれないですね。

自分が何かに集中していると普通時間の経過を忘れますから、あっという間に数時間が経っていたという経験を君たちも持っていることでしょう。若い頃、ダニエル・キイスの『アルジャーノンに花束を』を読んだ時、あまりの面白さに相当集中していたらしく、時間の概念どころか日が落ちて暗くなるのも気づかなかった覚えがあります。読み終わった後は充実感だけがあって疲れは全く感じませんでしたから、心地よい集中は疲労とは無縁なのでしょうね、きっと。私は凡人の集中力しか持っていませんが、以前テレビで将棋の羽生さんが「集中しすぎてこっちの世界に戻ってこられないのではないかと恐ろしくなる瞬間がある」と、恐ろしいことを言っていました。天才にはそういうこともあるのですかね。もちろん永世七冠の天才にしても、自分の興味関心のある分野に限って、鬼のごとき集中力を発揮できるわけです。そもそも興味関心のあるもの以外には心が向かわないわけですから。とりわけ私たちの心を奪うもので、知的興味に勝るものはないと思います。知的興味のある所、特に努力なしに集中力は発揮されます。ということは、学校の勉強に知的興味が湧けば何の問題もないわけですね。しかし、教科書を読んでも特に面白くない、そう多くの生徒は(私もそうでしたが)思っていることでしょう。最近何かで読んだのですが、AIに「学校で使う教科書を読んでも興味が湧かないのはなぜか？」と聞いてみたという人がいて、AIの答えを紹介していました。「教科書は万人向けなので、あなた自身の経験や関心と結びつける工夫が少ないのです」とのこと。なるほど。確かに「私的な経験や興味」を教科書に盛り込むことは不可能でしょう。しかし、万人向けの教材を私的な興味へ向けることはできると思います。教科書で完結せずに、教科書をきっかけにして自分の興味・関心に

広げていく努力はできると思うのです。それに、授業は生徒が教科書を独学するのではなく、先生が教科書の内容を広げるような講義をしてくれるのですからね。

一般的に集中力のトレーニングにはどんなものがあるのでしょうか。私が聞いた限りでは、「反復」する、あるいはさせることが一番いいらしいですね。これ、必ず「行為」を伴うことが肝心です。音読であるとか、縄跳びでもいい、何か行為を行うわけです。実際、自分の子どもに毎日縄跳びをさせた先生がいらっしやいます。この場合、特に気をつけなければならないのは、毎日同じ時間に行うことと例外を作らないことです。つまり「しない日」を作らないこと。これが重要なですね。「学問の大禁忌は作輟なり」というのも、したりしなかつたりしてはならないということですから、つまり、これも例外を作ってはならないという戒めだと考えられます。毎日のことですから、縄跳びのたびに気が散っていたり、集中しないで音読したり、むしろそっちの方が難しくなりますよね。ともあれ、何らかの行為を続ける習慣を持つことで集中力は鍛えられる、と言われています。マザー・テレサは、思考が変われば言葉、行動、習慣、性格、運命と次々に変わっていくのだから、正しく思考することが肝心だと言いましたが、集中力を鍛える場合は「行動」が大切だと言えるでしょう。

そもそも「やる気というのはやり始めないと出てこない」ということも知っておくべきですね。行動なくして「やる気」も「集中力」もないということです。

今週のおすすめ

・辺見じゅん・林民夫 『ラーゲリより愛を込めて』 (文春文庫)

辺見じゅんの『収容所から来た遺書』(文春文庫)の映画脚本です。二冊読み、映画も観ました。映画は少し残念でした。やはり主人公はプロの役者がすべきですね。

山本幡男というフルネームは知りませんでしたが、この出来事自体は聞いていました。シベリア抑留は明らかな戦争犯罪だと思いますが、過酷な労働の中でも日本人がウズベキスタンのナヴォイに立派な劇場を建てた話はこの通信でも紹介しました。山本はこれに関係していませんが、ロシア語に堪能だったこともあり通訳として活躍します。病気で亡くなるのですが、遺書を書いても敵に没収されますから仲間が遺書を暗記するのですね、分担を決めて。それを祖国で待つ山本の家族に届ける物語です。

映画の脚本は、かなりの創作が入っていますが遺書はそのまま使われているようです。山本が子どもたちに残した言葉に彼の信念が伺えます。自分を鍛えろ、強く立派な人間になれ。このあたりは誰でも言えると思いますが「最後に勝つのは道義だぞ」という一文は、命をかけて道義を大切にしたい人間にしか書けないと思います。

ちなみに原作を読んで私が一番驚いたのは、山本に遺書を書くよう勧めたのが瀬島龍三だったということです。瀬島は先の大戦の折りに陸軍中佐で、軍の参謀だった人物です。作戦の中枢にいて戦争の何たるかを知っている人物です。シベリア抑留を経験したことは知っていましたが山本と接点があったのですね。君たち、大人になってからでいいので瀬島の『幾山河』を読むことをお勧めします。

BGMは 今井美樹 の *Miss You* でした…。